本文の読解から自己表現へ（2）

授業レポート CLASS REPORT

― 音読指導の工夫 ―

立川研一　Tatsukawa Kenichi　（大分県九重町立野上中学校）

1. 音読指導の前の「聞き取り」指導の工夫

本稿では，様々な音読練習のアイデアについて，筆者が行ってきた工夫を述べていく。

本文の読解や音読に先立って，生徒に教科書付属の指導用 CD を聞かせることは多いと思う。その際に，ただ漫然と CD を流し，本文を目で追わせるだけでは，学習効果はあまり期待できない。本文を見ることもなく，ただ聞き流すだけの生徒も，中には見られるからである。

私は，どのような学習活動であっても，取り組みの前に何らかの活動の視点を生徒に与えることが大切だと考えている。CD を聞かせる際には次のような指示を出すことが多い。

指示の例

【教科書を閉じたままでの指示】

- 読んでいる人が何回息継ぎをしているか聞き取りなさい。
- ○○という単語が何回使われているか聞き取りなさい。（ポイントとなる語）
- ○○という単語が出てきたら，さっと手を挙げて，すぐ下ろしなさい。（ポイントとなる語）
- この本文の中で一番強調されていると思う単語（表現）を聞き取りなさい。

【教科書を開いた状態での指示】

- 各文で一番強く読まれている単語に印をつけながら聞きなさい。
- 読んでいる人が息継ぎをしているところにナナメ線（スラッシュ）を入れながら聞きなさい。
- （突然 CD を止めて）最後に聞こえた単語を指でさしなさい。（集中力が欠けているときなど）

ポイントは，「英語が得意でない生徒でも，よく聞いていれば答えられる」くらいの視点を与えることである。本文の内容をきちんと理解できなければ答えられないような難しい質問はここでは避ける。

時には「○○さんの夢は何ですか。答えの中心となる単語 1 語を聞き取りなさい」など，内容に踏み込んだ質問をすることもあるが，ここでの目的はあくまで，生徒の「聞き取り」に対する集中力を促し，あとの読解や音読の活動につなげていくことにある。CD を聞かせたあとには答え合わせをし，苦手な生徒が正解を言えたときには，その努力を讃え，達成感を感じさせるよう心がけている。

2 回目以降の聞き取りに際しては，少しずつ与える課題の難易度を上げていく。具体的には，前号で述べたような「具体的な場面の状況」や「登場人物の心情や行動」などについての質問を行い，4 人班ごとに聞き取れたことを話し合わせるのである。

また，学習がある程度進んだ段階では，聞き取りの途中でいきなり CD を止め，最後に聞こえた 1 文をノートに書き取らせることもある。その際も，いったん個人で書き取らせたあと，4 人班で協力して文章を正確に再現させるようにしている。生徒は，互いの書いた文章の冠詞や動詞の語尾など，細かい部分にまで注意を払うようになる。

毎回の授業でこれらの指導を全て行うことはできないが，本文の難易度や特徴に合わせて取り入れ，時には前時の復習として行ったりもしている。

2. 様々な音読活動

家庭学習で授業内容を振り返ることができるようにするため，授業時間中に全ての生徒が本文を理解し，音読できるようにさせたいものである。そのために，私は様々な方法を用い，授業中最低 10 回以上は本文の音読をさせ，内容を考えさせるようにし

ている。「○回読んだら座りなさい」のように，同じ方法で数回読ませて終わるのではなく，練習方法に変化を加えながら生徒が積極的に練習に取り組めるように心がけている。以下に，私が授業に取り入れてきた音読指導の工夫のいくつかを述べる。

(1)「チャンク読み」と「同時通訳読み」

音読の１回目は，意味の固まり（チャンク）ごとに切りながら範読し，リピートさせ，本文にナナメ線（スラッシュ）を入れさせる。２回目は，単語の発音とスラッシュの位置を確認させるために再度リピートさせ，３回目は，ペアごとに互いの発音を聞き合わせながら読ませて，全ての単語の読み方を確認させる。

さらに，チャンクごとに教師が日本語を言い，生徒にはその部分にあたる英語を言わせたり，逆に教師がチャンクごとの英文を言い，生徒がその部分の日本語を言う「同時通訳読み」をさせたりする。

ただし，教科書だけを見ながらこれら全ての活動を行うことは，よほど英語が得意な生徒でない限り，難しい。必要に応じ生徒の状況に合わせた補助プリントを用い，ペアでも練習に取り組ませている。

【補助プリント例】
Welcome / to my page. Last week / we visited /
ようこそ /〔　　〕/〔　　〕/ 私たちは訪れた /

Mr Sato, / a volunteer teacher. We made / *washi*, /
佐藤さんを / ボランティアの先生 / 私達は〔　〕/ 和紙を /

Japanese paper, / with him. Washi needs / clean water.
日本の紙 /〔　　〕/ 和紙は必要とする /〔　　〕を

（平成 18 年度版 *NEW CROWN BOOK 2*, p.12）

(2) 音読のスピードを変えさせる

すらすらと英文をなめらかに読ませるだけではなく，私は単語や文章の終わりの子音も，生徒にしっかりと発音させるようにしている。語尾の子音までしっかり出すための練習として，スピードを思いきって落とした音読練習も行う。

OLYMPUS の IC レコーダー，Voice Trek を使えば，音程を下げないで音声のスピードを落とすことができる。また，多くのパソコンに標準装備されている Windows Media Player を使えば，CD の再生速度を簡単に変えることができる。これらを利用してゆっくりとした英文を聞かせると，ネイティブスピーカーが子音をしっかり発音していることがはっきりと聞き取れる。生徒に子音の重要性を実感させるために，非常に有益である。

逆に，思いきりスピードを上げて読ませることもある。速く読めることだけが必ずしもよいことではないだろうが，速い英文を聞き取る力をつけるためにも，速読の練習は大切であると考える。大きく息を吸って一息でどこまで読めるか競争したり，ストップウォッチを用いて早読み競争をしたりと，生徒のチャレンジ精神を喚起するように工夫している。

どんな長い本文でも教師は必ず一息で読める，ということを生徒に実際に見せて威張ってみせると，生徒は燃える。（もちろん前もって教師の音読練習は欠かせないが…。）

(3) Read & Look Up, Overlapping, and Shadowing

自然なスピードや発音，イントネーションに慣れさせるためにも，再び CD を用いて，CD と同じように読ませる練習を行う。

CD を聞いているときは本文を見てよいが，読むときは顔を上げさせる Read & Look Up，本文を見ながら CD と同じスピード，同じイントネーションで読ませる Overlapping，また，本文を見ないで CD から聞こえた英文を CD と同じように繰り返させる Shadowing などを，適宜取り入れて練習に取り組ませている。

(4) 二人称読み，三人称読み

主語が I（we）である一人称主語の本文の場合，ペアで以下のような発展的な音読練習に取り組ませている。１人は教科書を見ながら１文ずつ本文を音読するだけだが，パートナーは，教科書を見ずに，相手の言った英文の主語を you に替えて文全体を繰り返すのである。具体的には以下のような会話になり，ちょうど相手の言った文の主語を you に替えて相づちを打っているような形になる。（下線部

はBが替えなければならない部分を示す。AはBの言ったことが正しければ“Yes”と言って，次の文に進む。）

【実際の練習例】
A: We have many languages in India.
B: You have many languages in India.
A: Yes. I use three of them.
B: You use three of them.
A: Yes. ...
（中略）
A: Yes. I like using all of my languages.
B: You like using all of your languages.
（以下略）
（平成18年度版 *NEW CROWN BOOK 2*, p.53）

また，この練習のさらなる発展形として，Bが，主語を三人称（he / she / they）にして文全体を言い換えることもある。主語を替えることに伴い，代名詞や動詞の語尾を適切に変化させなければならず，その際の意味の変化も同時に頭に浮かべなければならないので，かなり難易度の高い練習となる。本文全体を用いて練習させるのは難しいかもしれないが，会話の一部を抜き出して取り組ませたり，前学年の教科書の会話文を用いて行うだけでもかなりよい文型練習となる。

(5) 状況設定劇場

会話形式の本文の場合は，登場人物の性格付けをしたり，会話が行われている場所や状況を設定したりすることで，読み方を工夫させる音読練習もよく行う。例えば，以下のような本文に対して，あとのような指示を出してペアで音読練習させるのである。

Ming: Excuse me. Where is the toilet?
Clerk: It's near the shop. Under the stairs. Over there.
Ming: I see. Thank you.
Clerk: You are welcome.
（平成18年度版 *NEW CROWN BOOK 1*, p.42）

指示

実は今，Mingは切羽詰まった状態で，大急ぎでトイレに行きたいのです。Mingはできる限り早口で話しなさい。店員さんはゆっくりと優しく丁寧に場所を教えてあげてください。

この活動を私のクラスでは「状況設定劇場」と呼ぶ。生徒は意欲的に，工夫して様々な読み方をする。音読の声が大きくなること請け合いである。

同じ本文でも異なる状況を設定することで，読み方が全く変わる場合もある。教室での会話の場面を，「騒がしい昼休みの体育館」や「静かな雰囲気の高級レストラン」での会話に変えたり，「帰りの電車の時間に間に合うように大急ぎで歩きながら」の会話に変えたりすることで，大きい声になったり小さい声になったり，また早口になったり遅くなったりと，様々な読み方に変わっていく。

私の生徒たちが一番燃えて大きな声を出す「状況設定」の指示は以下の2つである。どこの本文でも使えるので，一度ぜひお試しいただきたい。

指示

- 2人は実はお年寄りで，お互いの言うことがときどき聞こえないときがあります。聞こえないときは相手に“Pardon?”を使って聞き返してください。“Pardon?”は何回使ってもかまいません。
- 2人は警察官の上官と部下です。部下であるBさんは，全ての台詞の最後に“～, Sir.”をつけて元気よく話してください。

教室中“PARDON?”や“SIR!”の大合唱になる。

3. おわりに

本稿ではこれまでに私が学び，実践してきた教科書本文の音読練習についての工夫を述べてきた。次回は教科書本文を利用したライティングやスピーキング活動など，自己表現活動についての工夫やアイデアを述べる。